

2 令和8年度「星空舞」栽培指針

I 生育指標・技術内容の一部改訂(標高適応性(作付可能地帯)標高500m程度)

収量、品質、食味の安定を目的とした標高地帯別(平坦地帯(標高0~150m未満)、中間地帯(150~300m未満)、山間地帯(標高300m以上)における生育指標及び生育指標達成のための技術内容を、以下のとおりとする。

標高地帯別の生育指標

地 帯	形 質	総穀数(/ m ²)	幼形期茎数(/ m ²)	穂数(/ m ²)
平坦地帯(標高150m未満)		25,000~29,000粒	290~420本	300~360本
中間地帯(標高150~299m)		25,000~32,000粒	320~540本	300~410本
山間地帯(標高300m以上)		25,000~34,000粒	310~540本	290~430本

生育指標達成の場合全ての標高地帯でおおむね以下の収量・品質・食味を達成する
【目標値】
○精玄米歩合 92%以上
○収量 500 kg/10a 以上
○整粒率 70%以上
○食味値80以上



生育指標を達成するための技術内容

地 帯	形 質	葉色(SPAD値)		水管理指標値											
				土壤硬度(mm)				かかと沈下深(cm)				亀裂幅(mm)			
		幼穂形成期	穗肥Ⅰ時	出穂期	出穂20日後	中干終了時	幼穂形成期	出穂20日後	中干終了時	幼穂形成期	出穂20日後	中干終了時	幼穂形成期	出穂20日後	
平坦地帯 (標高150m未満)		36以下	35以下	36以下	34以下	11mm	3~10mm	3~6mm	4cm	5~9cm	7~9cm	10mm	3~8mm	3~5mm	
中間地帯 (標高150~299m)		38以下	—	35以下	34以下	11mm	1~8mm	4~7mm	4cm	6~10cm	6~8cm	10mm	1~6mm	3~6mm	
山間地帯 (標高300m以上)		33以下	—	37以下	37以下	11mm	2~7mm	1~8mm	4cm	6~9cm	6~10cm	10mm	2~6mm	1~6mm	

注1)かかと沈下深:長靴をはいた片足にゆっくり体重をかけ、田面が沈んだ深さを示す。面積の小さい範囲の測定になるため、体重による差はほとんどない。

注2)中干終了時の土壤硬度・かかと沈下深・亀裂幅は令和4年の農業試験場は場の数値

※基肥増施等の施肥改善が、生育に及ぼす影響を確認しながら、収量性向上と品質・食味維持を両立する生育モデルの検討を継続。

II 栽培技術

項目	技術 内 容	理 由
収量・品質・食味目標	【収量・品質・食味目標】 精玄米歩合 92%・玄米収量 500kg/10a・整粒率 70%・食味値 80 以上	・整粒率は、農業試験場で新規導入した穀粒判別器(RGQI100B)の数値とする。(より目視に近い数値で判定) ※今後、収量目標を向上しても食味値80以上を維持できる可能性が高く、市場評価を高めるために、令和7年度から目標値を向上した。 現地の積極的な増施による増収事例を収集しながら、品質及び食味関連の目標水準を高める取組みを継続。

ほ 場	<ul style="list-style-type: none"> ・大豆跡・レンゲ跡ほ場も作付可能とする。 ・堆肥施用についても施肥可能とする。 <p>※堆肥の施用量、レンゲの鋤込み量は2トンまでとする。</p> <p>表 レンゲの草丈及び生草量と、窒素・リン酸・加里成分量との関係</p> <table border="1"> <thead> <tr> <th rowspan="2">生草重 (t/10a)</th> <th rowspan="2">草丈 (cm)</th> <th colspan="3">平均値(kg/10a)</th> <th colspan="3">最低値(kg/10a)</th> <th colspan="3">最高値(kg/10a)</th> </tr> <tr> <th>窒素</th> <th>リン酸</th> <th>加里</th> <th>窒素</th> <th>リン酸</th> <th>加里</th> <th>窒素</th> <th>リン酸</th> <th>加里</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>0.8</td> <td>35</td> <td>3.2</td> <td>0.1</td> <td>2.7</td> <td>2.7</td> <td>0.1</td> <td>2.3</td> <td>3.8</td> <td>0.2</td> <td>3.0</td> </tr> <tr> <td>1.1</td> <td>40</td> <td>4.7</td> <td>0.2</td> <td>3.9</td> <td>3.9</td> <td>0.1</td> <td>3.4</td> <td>5.6</td> <td>0.2</td> <td>4.5</td> </tr> <tr> <td>1.5</td> <td>45</td> <td>6.3</td> <td>0.2</td> <td>5.2</td> <td>5.2</td> <td>0.1</td> <td>4.4</td> <td>7.4</td> <td>0.3</td> <td>5.9</td> </tr> <tr> <td>1.8</td> <td>50</td> <td>7.8</td> <td>0.3</td> <td>6.4</td> <td>6.4</td> <td>0.2</td> <td>5.5</td> <td>9.1</td> <td>0.4</td> <td>7.3</td> </tr> <tr> <td>2.0</td> <td>52</td> <td>8.4</td> <td>0.3</td> <td>6.9</td> <td>6.9</td> <td>0.2</td> <td>5.9</td> <td>9.8</td> <td>0.4</td> <td>7.9</td> </tr> <tr> <td>4.0</td> <td>80</td> <td>16.8</td> <td>0.6</td> <td>13.9</td> <td>13.9</td> <td>0.4</td> <td>11.9</td> <td>19.8</td> <td>0.8</td> <td>15.8</td> </tr> </tbody> </table> <p>注1)レンゲ生草量と草丈の関係は$y=7.106X-172.558$ ($r=0.9822^{**}$) (y:生草重kg/a, X:草丈cm)を用いる。 適用範囲は草丈35～85cmとした。(苗立ち数の適用範囲: 160～860本/m²)</p> <p>注2)レンゲ生草量1トン当たりの成分量(kg/10a)は、窒素3.5～5kg、リン酸0.1～0.2kg、加里3～4kgとした。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・雑草発生の少ない良質なほ場を選定し、日照が不足しがちな谷間での作付は避ける ・標高500m程度までの作付とする ※出穂限までに出穂期を迎えるような田植時期とする。(標高400m以上は5月上旬田植) ※より高標高地域での作付をする必要がある場合は、冷涼な気象の影響で登熟が困難となるリスクを十分考慮した上で取り組むこと 	生草重 (t/10a)	草丈 (cm)	平均値(kg/10a)			最低値(kg/10a)			最高値(kg/10a)			窒素	リン酸	加里	窒素	リン酸	加里	窒素	リン酸	加里	0.8	35	3.2	0.1	2.7	2.7	0.1	2.3	3.8	0.2	3.0	1.1	40	4.7	0.2	3.9	3.9	0.1	3.4	5.6	0.2	4.5	1.5	45	6.3	0.2	5.2	5.2	0.1	4.4	7.4	0.3	5.9	1.8	50	7.8	0.3	6.4	6.4	0.2	5.5	9.1	0.4	7.3	2.0	52	8.4	0.3	6.9	6.9	0.2	5.9	9.8	0.4	7.9	4.0	80	16.8	0.6	13.9	13.9	0.4	11.9	19.8	0.8	15.8	<ul style="list-style-type: none"> ・大豆跡、レンゲ跡、堆肥施肥において、食味、品質に悪影響が出ないことが確認されたため。 ・但し、以下の基準を厳守する。 <table border="1"> <thead> <tr> <th>区分</th> <th>栽植密度</th> <th>基肥窒素</th> <th>穂肥I</th> <th>穂肥II</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>大豆跡</td> <td rowspan="5">坪50～60株</td> <td>無施用</td> <td rowspan="3">葉色診断に応じて 0kg、2kg</td> <td rowspan="3">葉色診断に応じて 0kg、1kg、2kg</td> </tr> <tr> <td>排水不良</td> <td>0～2kg</td> </tr> <tr> <td>高地力</td> <td>無施用</td> </tr> <tr> <td>レンゲ跡</td> <td rowspan="2">3kg</td> </tr> <tr> <td>堆肥施用</td> </tr> </tbody> </table> <ul style="list-style-type: none"> ・レンゲの鋤込み:生草量は2トンまでとし、田植20日前までに鋤込み。 ・混合堆肥等即効性成分を多く含む資材を春施用する場合は、堆肥成分表を確認の上、3割程度減肥する。 ※高地力田:「コシヒカリ」を慣行施肥量で栽培した場合に倒伏するような水田 ※排水不良田:2～3年程度に一度の割合でしか中干しが十分にできないような水田 ・平成27年の低温年でシミュレーションしたところ、出穂限までに出穂期を迎えた場合、標高500m程度まで成熟可能と判断された。なお、R3～5年産は標高655m (R2年度は標高485m)まで成熟した。 	区分	栽植密度	基肥窒素	穂肥I	穂肥II	大豆跡	坪50～60株	無施用	葉色診断に応じて 0kg、2kg	葉色診断に応じて 0kg、1kg、2kg	排水不良	0～2kg	高地力	無施用	レンゲ跡	3kg	堆肥施用
生草重 (t/10a)	草丈 (cm)			平均値(kg/10a)			最低値(kg/10a)			最高値(kg/10a)																																																																																															
		窒素	リン酸	加里	窒素	リン酸	加里	窒素	リン酸	加里																																																																																															
0.8	35	3.2	0.1	2.7	2.7	0.1	2.3	3.8	0.2	3.0																																																																																															
1.1	40	4.7	0.2	3.9	3.9	0.1	3.4	5.6	0.2	4.5																																																																																															
1.5	45	6.3	0.2	5.2	5.2	0.1	4.4	7.4	0.3	5.9																																																																																															
1.8	50	7.8	0.3	6.4	6.4	0.2	5.5	9.1	0.4	7.3																																																																																															
2.0	52	8.4	0.3	6.9	6.9	0.2	5.9	9.8	0.4	7.9																																																																																															
4.0	80	16.8	0.6	13.9	13.9	0.4	11.9	19.8	0.8	15.8																																																																																															
区分	栽植密度	基肥窒素	穂肥I	穂肥II																																																																																																					
大豆跡	坪50～60株	無施用	葉色診断に応じて 0kg、2kg	葉色診断に応じて 0kg、1kg、2kg																																																																																																					
排水不良		0～2kg																																																																																																							
高地力		無施用																																																																																																							
レンゲ跡		3kg																																																																																																							
堆肥施用																																																																																																									
栽培様式	<p>・移植(高密度苗含む)・直播等の栽培様式は限定しない。※但し、直播栽培は様式が多様で、雑草多発や収量減のリスクが伴うため、技術の本格導入前に指導機関へ相談の上実証のこと。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・移植では育苗期間が適正な健苗の育成に努める。 	<p>・直播栽培に適性の高いきぬむすめ対比で、湛水表面散播において倒伏性等の栽培特性に問題はなく、移植対比で品質、食味に差がないことを確認(R5～7年度)。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・高密度播種苗栽培(植付株数坪50～60株)では、収量、品質、食味に影響がないと確認された(R6)。 ・展示ほ(H30年)において、播種から田植えまでの日数が過多となった老化苗移植ほ場があり、生育・収量に悪影響を及ぼす事例があったため。 																																																																																																							
田植	<ul style="list-style-type: none"> ・田植時期は、5月16日から5月31日までとする。 ※地域の水利慣行に対応して5月31日以降の田植になる場合はくず米発生のリスクを考慮すること ・平坦地帯では、くず米の増加を抑えるために5月末日までとする。 ※くず米の目安は、5/24まで8%未満、6/7までであれば10%未満 ・中間地帯では、幼穂形成期茎数を抑え、高い玄米品質を維持するため、5月中下旬以降とする。 ・山間地帯については、成熟不能のリスクを回避するため、高標高では出穂限より前に出穂するよう、5月上旬までに田植を行う。 	<ul style="list-style-type: none"> ・田植期が極端に早いと、「コシヒカリ」との作期分散によるメリットが小さくなるため ・農試の田植時期に関する試験(H27年)において、6月5日植で稈の伸長、白濁未熟粒増加の傾向が見られ、遅い田植期ではリスクが更に高まることが予想されるため ・収量、品質、食味の安定に資するための標高地帯別の生育指標を達成するには、地帯区分別の田植日の設定が必要なため ・山間地帯については、冷涼年の登熟停止のリスクを回避するために継続した事例の収集が必要 																																																																																																							
栽植密度	<ul style="list-style-type: none"> ・田植機の植付株数を坪50株～坪60株設定とする。 	<ul style="list-style-type: none"> ・坪40株以下では食味低下の懸念があり、栽植株数は坪50株～坪60株設定が妥当 ・農試の栽植密度に関する試験(H29年)において、疎植により稈が伸長し倒伏のリスクが高まる傾向が見られ、場内栽植密度試験の解析により、坪40株以下では食味の低下が懸念されるため 																																																																																																							

施 肥	<p>1. 速効性肥料による分施体系</p> <ul style="list-style-type: none"> ・全地帯とも、基肥窒素量は、3kg/10aとする。 ・穂肥は葉色診断に基づき施用量を加減する <ul style="list-style-type: none"> ・黒ボクや排水不良田では基肥窒素量 0~2kg/10a を施用の上作付け可能とする。 	<p>・R2~3年度調査データの解析結果より、中間地帯、山間地帯において、基肥窒素施用量 3kg/10a を下回る減肥により品質、食味の低下はみられなかつたが、収量が低下したため。</p> <p>・収量性向上に向けて基肥窒素増施の検討を継続。</p>																																																																																			
	<p>【分施】穂肥施用基準</p> <table border="1"> <thead> <tr> <th>区分</th><th>施用時期</th><th>葉色値 (SPAD)</th><th>葉色板</th><th>窒素施用量 (10a当たり)</th></tr> </thead> <tbody> <tr> <td rowspan="2">穂肥 I</td><td rowspan="2">幼穂8~10mm時</td><td>35未満</td><td>4.0未満</td><td>2kg</td></tr> <tr><td>35以上</td><td>4.0以上</td><td>無施用</td></tr> <tr> <td rowspan="3">穂肥 II</td><td rowspan="3">幼穂8~10mm時 の7~8日後</td><td>32以下</td><td>3.5以下</td><td>2kg</td></tr> <tr><td>32~35</td><td>3.5~4.0</td><td>1kg</td></tr> <tr><td>35以上</td><td>4.0以上</td><td>無施用</td></tr> </tbody> </table>	区分	施用時期	葉色値 (SPAD)	葉色板	窒素施用量 (10a当たり)	穂肥 I	幼穂8~10mm時	35未満	4.0未満	2kg	35以上	4.0以上	無施用	穂肥 II	幼穂8~10mm時 の7~8日後	32以下	3.5以下	2kg	32~35	3.5~4.0	1kg	35以上	4.0以上	無施用																																																												
区分	施用時期	葉色値 (SPAD)	葉色板	窒素施用量 (10a当たり)																																																																																	
穂肥 I	幼穂8~10mm時	35未満	4.0未満	2kg																																																																																	
		35以上	4.0以上	無施用																																																																																	
穂肥 II	幼穂8~10mm時 の7~8日後	32以下	3.5以下	2kg																																																																																	
		32~35	3.5~4.0	1kg																																																																																	
		35以上	4.0以上	無施用																																																																																	
<p>2. 緩効性肥料による基肥一発体系</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「星空舞」または「コシヒカリ」用の肥料を用い、窒素施肥量 6kg/10a を基準とする ・基肥一発体系における穂肥 II については、希望する場合は指導機関に相談のうえ実施を検討する。 	<p>・令和4年に星空舞用の全農開発肥料を現地3ほ場で検討し、緩効性窒素 90 日溶出タイプで適性を確認した。</p> <p>・基肥一発による省力施肥体系確立のため、不足する窒素の追肥ではなく、基肥窒素増量や資材変更の方向性で検討を継続。</p> <p>・葉色低下した場合の穂肥 II 施用によって、食味を維持しつつ、整粒率が改善され、収量等も増加傾向となる事例があつたが、食味や費用対効果等を確認する必要があるため。</p>																																																																																				
水 管 理	<p>【基肥一発】穂肥施用基準</p> <table border="1"> <thead> <tr> <th>区分</th><th>施用時期</th><th>葉色値 (SPAD)</th><th>葉色板</th><th>窒素施用量(10a当たり)</th></tr> </thead> <tbody> <tr> <td>穂肥 I</td><td>幼穂8~10mm時</td><td></td><td></td><td>施用しない</td></tr> <tr> <td rowspan="2">穂肥 II</td><td rowspan="2">幼穂8~10mm時 の7~8日後</td><td>32以下</td><td>3.5以下</td><td>推奨しない (指導機関に相談のうえ1kg以内で判断)</td></tr> <tr><td>32超過</td><td>3.5超過</td><td>無施用</td></tr> </tbody> </table> <p>※32以下は32を含み、32超過は32を含まない</p>	区分	施用時期	葉色値 (SPAD)	葉色板	窒素施用量(10a当たり)	穂肥 I	幼穂8~10mm時			施用しない	穂肥 II	幼穂8~10mm時 の7~8日後	32以下	3.5以下	推奨しない (指導機関に相談のうえ1kg以内で判断)	32超過	3.5超過	無施用																																																																		
区分	施用時期	葉色値 (SPAD)	葉色板	窒素施用量(10a当たり)																																																																																	
穂肥 I	幼穂8~10mm時			施用しない																																																																																	
穂肥 II	幼穂8~10mm時 の7~8日後	32以下	3.5以下	推奨しない (指導機関に相談のうえ1kg以内で判断)																																																																																	
		32超過	3.5超過	無施用																																																																																	
<p>3. その他</p> <ul style="list-style-type: none"> ・有機質肥料の施用について、2トン/10a までの堆肥施用及び2トン/10a までのレンゲ鋤込みは可。 ・鶏糞の基肥施用を可とする。 <p>※但し、資材の成分量を正しく確認し、鶏糞の肥効率は 50%で、分施の化成肥料の基肥窒素量と同程度の量を換算して施用する。</p> <p>※初めて施用する際は指導機関へ相談のこと。</p>	<p>・ブランド化を進める上で、食味の制御が困難な有機質肥料の施用は慎重に検討すべきであるが、現地で複数年実証した結果収量・品質・食味が目標に達しているため</p> <p>・分施体系において、発酵鶏糞(窒素含有率約 4%)を基肥に 150kg/10a 程度施用することにより、収量確保が可能で、品質・食味にも問題がないことを確認(R6~7 年度)。但し、山間地では初期生育が緩慢となる可能性があるため、状況に応じて基肥の追加が必要な場合がある。引き続き鶏糞の効率的な利用方法について検討。</p>																																																																																				
<p>標高地帯別の水管理指標値(土壤硬度・かかと沈下深・亀裂幅)の目安を設定</p> <p>生育指標を達成するための技術内容</p> <table border="1"> <thead> <tr> <th rowspan="3">地 带 形 質</th><th colspan="4">葉色 (SPAD値)</th><th colspan="10">水管理指標値</th></tr> <tr> <th colspan="4"></th><th colspan="3">土壤硬度 (mm)</th><th colspan="3">かかと沈下深 (cm)</th><th colspan="4">亀裂幅 (mm)</th></tr> <tr> <th>幼穂形 成期</th><th>穂肥 I 時</th><th>出穂期</th><th>出穂20 日後</th><th>中干終 了時</th><th>幼穂形成 期</th><th>出穂20日 後</th><th>中干終 了時</th><th>幼穂形成 期</th><th>出穂20日 後</th><th>中干終 了時</th><th>幼穂形成 期</th><th>出穂20日 後</th></tr> </thead> <tbody> <tr> <td>平坦地帯 (標高150m未満)</td><td>36以下</td><td>35以下</td><td>36以下</td><td>34以下</td><td>11mm</td><td>3~ 10mm</td><td>3~6mm</td><td>4cm</td><td>5~9cm</td><td>7~9cm</td><td>10mm</td><td>3~8mm</td><td>3~5mm</td></tr> <tr> <td>中間地帯 (標高150~299m)</td><td>38以下</td><td>—</td><td>35以下</td><td>34以下</td><td>11mm</td><td>1~8mm</td><td>4~7mm</td><td>4cm</td><td>6~10cm</td><td>6~8cm</td><td>10mm</td><td>1~6mm</td><td>3~6mm</td></tr> <tr> <td>山間地帯 (標高300m以上)</td><td>33以下</td><td>—</td><td>37以下</td><td>37以下</td><td>11mm</td><td>2~7mm</td><td>1~8mm</td><td>4cm</td><td>6~9cm</td><td>6~10cm</td><td>10mm</td><td>2~6mm</td><td>1~6mm</td></tr> </tbody> </table> <p>注1)かかと沈下深:長靴をはいた片足にゆっくり体重をかけ、田面が沈んだ深さを示す。面積の小さい範囲の測定になるため、体重による差はほとんどない。</p> <p>注2)中干終了時の土壤硬度・かかと沈下深・亀裂幅は令和4年の農業試験場ほ場の数値</p> <p>・中干しを適切に実施する。</p>	地 带 形 質	葉色 (SPAD値)				水管理指標値														土壤硬度 (mm)			かかと沈下深 (cm)			亀裂幅 (mm)				幼穂形 成期	穂肥 I 時	出穂期	出穂20 日後	中干終 了時	幼穂形成 期	出穂20日 後	中干終 了時	幼穂形成 期	出穂20日 後	中干終 了時	幼穂形成 期	出穂20日 後	平坦地帯 (標高150m未満)	36以下	35以下	36以下	34以下	11mm	3~ 10mm	3~6mm	4cm	5~9cm	7~9cm	10mm	3~8mm	3~5mm	中間地帯 (標高150~299m)	38以下	—	35以下	34以下	11mm	1~8mm	4~7mm	4cm	6~10cm	6~8cm	10mm	1~6mm	3~6mm	山間地帯 (標高300m以上)	33以下	—	37以下	37以下	11mm	2~7mm	1~8mm	4cm	6~9cm	6~10cm	10mm	2~6mm	1~6mm	<p>・精玄米歩合 92%以上確保するため、複数年のデータを用いた適正な土壤硬度やかかと沈下深が必要と判断したため</p> <p>・過度に土を固めると、精玄米歩合が低下する事があるため</p> <p>・「きぬむすめ」の良質米生産における中干しの効果に関する栽</p>
地 带 形 質		葉色 (SPAD値)				水管理指標値																																																																															
						土壤硬度 (mm)			かかと沈下深 (cm)			亀裂幅 (mm)																																																																									
	幼穂形 成期	穂肥 I 時	出穂期	出穂20 日後	中干終 了時	幼穂形成 期	出穂20日 後	中干終 了時	幼穂形成 期	出穂20日 後	中干終 了時	幼穂形成 期	出穂20日 後																																																																								
平坦地帯 (標高150m未満)	36以下	35以下	36以下	34以下	11mm	3~ 10mm	3~6mm	4cm	5~9cm	7~9cm	10mm	3~8mm	3~5mm																																																																								
中間地帯 (標高150~299m)	38以下	—	35以下	34以下	11mm	1~8mm	4~7mm	4cm	6~10cm	6~8cm	10mm	1~6mm	3~6mm																																																																								
山間地帯 (標高300m以上)	33以下	—	37以下	37以下	11mm	2~7mm	1~8mm	4cm	6~9cm	6~10cm	10mm	2~6mm	1~6mm																																																																								

※土質により中干し期間を調節する。
※中干し終了時（幼穂形成期が晩限）～出穂20日後の標高地帯別の水管理指標値を目安に適切に実施する。

培試験（H28年）及び専門技術員による智頭町「コシヒカリ」の品質向上のための調査研究（H26年）において、中干しを行うことで品質、食味が向上することが認められている。

【参考】「星空舞」標高別生育指標を達成するための中干し開始茎数の目安

標高地帯区分	目標穂数 (本/m ²)	目標穂数に対する中干し開始茎数(本/株)の割合							
		7割		8割		9割		10割	
		坪50株	坪60株	坪50株	坪60株	坪50株	坪60株	坪50株	坪60株
		株間22cm	株間18cm	株間22cm	株間18cm	株間22cm	株間18cm	株間22cm	株間18cm
平坦地帯 (標高150m未満)	300～360	14～17	12～14	16～19	13～16	18～21	15～18	20～24	17～20
中間地帯 (標高150～299m)	300～410	14～19	12～16	16～22	13～18	18～24	15～20	20～27	17～23
山間地帯 (標高300m以上)	290～430	13～20	11～17	15～23	13～19	17～26	14～21	19～28	16～24

・収穫前10日以前に完全落水しない。

※完全落水:水戻を落として、入水しないこと

・「コシヒカリ」における落水時期に関する試験結果（H7年）（「登熟期間の温度、水管理が米の品質に及ぼす影響」）及び奨励品種決定調査現地試験（H29年）において、早期落水により収量が低下することが認められたため

防除	・「コシヒカリ」並の防除を基本とする。	・病害虫の発生による収量及び品質の低下を防ぐため
----	---------------------	--------------------------

収穫時期	☆標高300m未満; 有効積算気温620～770°C・日 (積算気温1000～1260°C) (青穀;0～10%、穀水分19～22%) ※但し、晚限付近の刈取は胴割や白未熟の増加リスクに留意 ☆標高300m以上; 有効積算気温510～620°C (積算気温920～1170°C) (青穀;0～12%、穀水分23～24%)	「星空舞」の収穫適期	・累年データを用いた解析により、星空舞の収穫適期は、標高300mで区分するのが妥当
	標高区分	出穂後日数 (日)	出穂後有効積算気温 (°C・日)
	300m未満	39～50日	620～770°C・日

注) 2017,2020,2021場内データ、2020,2021現地データ、整粒率は80%（新70%）以上、精玄米歩合は92%以上を確保

調製出荷	・1.85mmのふるいで選別する。 ・収穫物は品種毎に区分管理する。	・展示ほ（R元年）の解析により、1.80mmのグレーダーで玄米を調製すると、精玄米収量は約5%増加するが、整粒率が有意に低下すると考えられたため
------	---------------------------------------	--

穀の取扱い他	・自家採種せず、毎年更新種子を使用し、種子の譲渡は絶対にしない。 ・育苗作業において、品種ラベルの貼付、品種名の確認や機器の清掃を徹底し、別品種と区分する。 ・定期的に場を見回り、漏生苗等は確実に抜取る。 ・品種が異なるごとにコンバインの清掃を徹底し、残留穀を完全に除去する。 ・乾燥調製作業に使用する機械・ラインは、品種が異なるごとに清掃を徹底する。 ・乾燥機、貯留タンク、穀摺機等に品種ラベルを明示する。 ・米袋、フレコンは、品種ごとに明確に区分して保管・出荷する。	・異品種混入によるブランドイメージの低下を防止するため
--------	---	-----------------------------